極東史上に於ける滿洲の歷史地理

東京帝大名譽教授
文學博士　白鳥庫吉

一

極東史上に於ける滿洲の歷史地理と云ふ事は甚だ廣汎な問題であつて、その全豹を僅少な時間に話し盡すのは不可能に近い。私は明治四十一年來、四五の人々と滿鮮の歷史研究に當つてゐるが、今日なほ未だ盡さないのである。そこで問題を或る一局部に限つて稍詳かに話して見たいと思ふ。

私は曾て二回ほど滿洲に旅した事がある。一回は明治四十一年の事で、滿洲の歷史を研究するには地理の心得が無ければならぬ、それには現地踏査の必要があると云ふ所から、他の學者たちとも申し合せて赴いたのである。その時には、私の組はハルビンから浦鹽斯德へかけての北滿地方に旅行し、別の一組は、奉天から錦州、朝陽と、熱河省の方面へ行つた。私の北滿旅行の目的は、女眞（後の金）の都を見たいのが一つと、今一つは渤海國の都を見たいと云ふ此の二つにあつた。女眞の舊都はハルビンの東七八里、阿什河の流域にある。其の邊には馬賊が出沒すると云ふので、相當警戒して行つたが、幸ひに出會しなかつた。次の渤海の都は東京城と稱し、元のニグタの南七八里、牡丹江の流域に當

つてゐる。私は當時、梅林で鐵道を離れ、武裝した兵士を差添へられて、同行四五人と乘り込んで行つたのであるが、其の邊一帶は有名な馬賊の巢で、非常に危險だつたにも關はらず、これ亦難を免れて、無事に探査を遂げて歸つた。

それから長い間同地方へは踏み込んで行かなかつたが、昭和十年の夏、好い機會があつたので、急に思ひ立つて、奉天・熱河への旅をした。先づ錦州から義州・朝陽へ出てそれから凌源・平泉へ行き、次に熱河へ行つたが、その時も義州附近の南方には匪賊がゐると聞いた。併しこれも不思議に襲擊を受けなかつた。熱河からは更に北平を志して、トラックで數時間の旅を續け、古北江へ出て、其處からバスで北平に行き、山海關を拔けて、一旦奉天へ引返した上、撫順を經由して吉林から新京へと出た。此の道もやはり匪賊の危險が多い所であるが、やはり何の事も無かつた。新京からは、更に又、長白山の北方に當る敦化へ行つた。此の敦化方面が又匪賊の盛な所で、聞く所に據ると、數日前にも匪賊の爲に拉致されて行つた儘消息の絕えた日本人があるとの事であつたが、これ亦何事もなく過ぎた。扨其の後は、局子街から清津・咸興・元山と經由して遂に京城へ歸つて來たが、此の旅行では、全行程を通じて三十一日間殆ど歩き續けた間に、到る所で匪賊出沒の話を聞かされない事はなかつたにも關らず、一度の難にも遭はなかつた。併しながら匪賊は今も確に滿洲の各地にゐるのであつて、現に當時の新聞には、日として匪賊の記事の絕えた事は無かつたのである。そこで滿洲には、なぜ斯の如く匪賊が跋扈するか、と云ふ事が問題になつて來る。

二

滿洲國の國是は王道樂土であると云ふ。樂土とは畢竟パラダイスを意味し、平和鄕を意味するが、實際の所、まだ絕

對の平和はない。奥地にはまだ匪賊が跋扈してる。勿論確かに其の數は段々減じてゐるに相違ないが、現在では遺憾ながら、其の絶滅はまだ理想であり、希望であり、これからの問題である。中々一擧にして平定し盡すといふ事は困難である。それは何故であるかと云ふと、滿洲の地に匪賊が出沒して物騷千萬であるといふ事實は、近年の明治とか、大正・昭和に初まつた事ではなく、古來の話で、其の萌す所は甚だ遠いからである。そこで、なぜ滿洲には匪賊が跋扈するかと云ふ事は、歴史上から其の根源的理由に遡つて解かねばならぬ重大問題となつて來る。

全體が滿洲と云ふ國は世界の歴史に類例の少い不思議な國である。統計に據ると滿洲全國の人口は今約三千萬であると云ふが、その人民は日・滿・蒙・支・鮮の五人種から組成されてゐる中でも、其の過半數は支那人であつて、滿洲人は比較的少く、日・鮮・蒙は遙に又少數である。ところが之に對して君臨してゐられる君主はと申せば、それは滿洲系である。支那人とは全く人種系統を異にした純粹滿洲人である。そして其の國の經濟・兵備に關して樞要の鍵鑰を握つてゐる者はといふと日本人である。世界に國も多いが、斯ういふ複雜な關係に立つた國は、恐らく先づ外に無いであらう。そこで、斯の如き一種特別な國がどうして極東に生れたかと云ふ事が、第二の問題となつて來るのである。私は以上二つの疑問に答へるため、以下に簡單な說明をしたいと思ふ。

先づ滿洲地圖を開いて見ると、此の國は、東は長白山、西は興安嶺、南は陰山々脈、北は小興安嶺を以て劃られ、大體に於て山嶽四周の一區域を成してゐる。卽ち蒙古の高原から興安嶺を越えると、地勢は自然に低くなつてゐて、其處に丘陵地帶を中界分水嶺とする松花江・遼河の流域が平坦の地をなしてゐる。それが現在の滿洲國である。斯の如く山河の形勢が自然に一地域を成してゐるのであるから、それが政治上一個の獨立國となつたのは當然の事であるが、此の

地域は、之を地質・地味・植物等の關係から觀ると、三つに別れる。第一に、興安嶺から東の方、興安省・熱河省等を含む部分には、勿論多少の肥沃地もあるが、概しては沙漠地帶であつて、これは西方蒙古沙漠の延長であり、侵入である。第二に黑龍江省の北方面、松花江流域の吉林省方面、これは今こそ伐木されてゐるが、往古からの森林地帶であつて、上代に遡れば遡る程巨大な森林であつた。それから第三に、山海關から、熱河・朝陽、更に伸びて遼東へかけての海岸地域は、支那の黃河流域と同じ黃土質で、耕作に適する肥沃地帶である。以上三地帶の中で昔は森林が最も廣地域を占めてゐたのであるが、而も地質風土の關係上、廣狹こそあれ大體に於てやはり今日と同じく三つに別れてゐたのである。そこで、其の三分域へ入り込んで來た人種も、自づから又三樣に分れてゐた。先づ支那に近い部分へは、文化の比較的進んでゐる農耕民の支那人が、熱河・朝陽・錦州・奉天・撫順の方面へと段々伸びて來て、遂には朝鮮の西北にまで轉進した。熱河から北方平泉に伸び、更に朝陽の北を經て奉天に走つてゐる所謂萬里の長城の線は、要するに滿洲に入込んだ支那人の進路を地圖の上に語るものである。次に熱河省・興安省の方面は、蒙古種の遊牧民が入り込んで來るのに適した地域で、前述の如く蒙古とは沙漠續きであるから、蒙古人は生活狀態を變へずに其のまゝ入り込める便宜がある。そこで此の方面には蒙古人が多くゐる。卽ち南部の漢人に對して、西部は蒙古人の占住地域である。ところが、同じ滿洲でも北部からシベリア方面へかけての大部分の住民はツングースである。後の滿洲人は勿論、靺鞨・肅愼・女眞などの名を以て史上に知られてゐるものゝ總ては皆此のツングースで、東北はオホーツク海にまで及んでゐる。元來森林種の民であるが、それが原住地から南下して、滿洲の北部に據つたのである。だから吉林省方面などはツングースの本場である。ところがこれは遊牧民ではなく、森林の鳥獸を獵獲して生活する狩獵民であるから、要するに滿洲と

云ふ處は、農耕民・遊牧民・狩獵民と各生活態度を異にする三人種が、三方から入り込んで來て顏を突き合せてゐる處である。山河の形勢は一地域でも、土質・地味・氣象の關係上、チヤイニース、モンゴール、ツングースと、三樣の異つた人種を載せて、古くから三つに分裂してゐたのである。抑もこれが滿洲の歷史地理的特色である。

同じ亞細亞大陸でも足一歩滿洲を出離れると、樣子がガラリと變る。興安嶺を西へ越えると、シベリアの南、長城の北は、所謂蒙古沙漠地で、遠くはウラルにまでも亘る茫漠たる砂原が、廣く東西に伸びて帶狀をなしつゝ、アジアの眞中を通つてゐる。そして其の沙漠帶の北は、幾日歩き續けても盡きない大森林であり、又、南は耕作に適し、文化民族の居住に適する肥沃地である。故に興安嶺以西にあつては、最北が山林の民、中央が遊牧民、南方が文化民と、住民が東西に平行する三段の地帶に別れて互に無交涉に住んでゐる形勢である。然るに滿洲では、それが一所に顏を突き合すのである。支那人にしても、ツングースにしても、原地にゐたのでは到底逢へる筈もない者が、滿洲では、呼べば直ちに相應ずるのである。これは確に注意すべき點であつて、而もそれが記錄以前からの古い關係である所に、其の統治の斷然むづかしい根源が存するのである。

斯かる狀態は、歐洲勢力の東漸、卽ち直接にはロシアの手が伸びて來るまでの久しい間繼續されたのであるが、その後ロシアの縱まゝな野望が一部實現を見るに至つて、我が日本の奮起を喚び起し、その結果は日本人朝鮮人の來住となつて、遂に日・滿・鮮・支・蒙の五族相寄つて國を建て、今日の如く支那人を主とする住民の上に、滿洲人が君臨し、日本人が之に力を添へるといふ特別の複雜な狀態を現出した。これは畢竟上述の特殊な土地柄に原因してゐるのであつて、歷史を遡つて考へて見ると、總てが決して偶然の出來事でないことがわかつて來るのである。

三

曾て支那人は、滿洲を以て支那の領域であると主張した事があつたが、上述の次第で、滿洲が現實に支那に領有された事實はない。歷史上支那の領土は、最も廣い時でも熱河省から盛京省・奉天省までゞ、それより北へ延びる事は出來なかつた。明代には僅に出た事があつたが、急いで又引返した。それは北方シラムレン、ラオハムレン流域には蒙古人がゐて壓してゐるからである。若くは土耳其人が居たからである。尤も一時朝鮮の西北地方を支那人が取つた事はあるが、決して全部は取れなかつた。故に吉林・熱河省方面へは出た事がないのである。そこで最も有利な地位を占めたのは、吉林省方面に據つてゐるツングースで、支那と蒙古とは南北に對立して互に牽制してゐるため、どちらも東へは手を延ばすことが出來ない。隨つて何處からもツングースは脅威を受けなかつた。又、今一つには、その方面の地が一塊の大森林を成してゐることが、ツングースたちの平安を護る天成の障壁であつた。確にこれは、守るに易く攻めるに困難な處で、例へば飛行機で爆彈を投下しても、豫期の威力を發揮することは出來ない。又、山は、私が二回の旅行で目擊した所に據ると、一體に緩やかなカーブを持つてゐて、日本や朝鮮に見るやうな山骨稜々たる峻山嶮嶽ではないから、木さへ生えてゐなければ、易々と突破は出來るのであるが、何を云ふにも、蓊鬱たる大密林である。而も此の方面に兵力を加へる上に比較的便宜を持つてゐる蒙古人はといへば、騎馬民族であつて、馬が足であるから、二三間行くにも馬上である。故に沙漠とか草原地ならば奔馳自由であるが、森林地ではどう仕樣もない。そんな關係で、此の大森林に據つた民族は、支那人にも蒙古人にも攻擊せられる事はなく、比較的永く獨立を保有することが出來た。肅愼・靺鞨

等の名を史上に留めてゐるのは此の民族であるが、しかし大した働きは出來なかつた。肅愼は今日學問上の問題であるが、その本地は寧古塔であつて、牡丹江の流域に據つたツングースである。そして之と同種に屬するものは、高麗・百麗・新羅の三國である。普通には之を朝鮮人と考へてゐるやうであるが、大まちがひであつて、正しくツングースの一種である。松花江の上流域、吉林省の南、鴨綠江の流域等を其の本據地とするツングースが、山の森林の中から出て、遼東・朝鮮等に入り込んだのである。ツングースが、王莽時代から唐の高宗の頃まで七八百年の間も其の壽命を保ち得たのは、全く其の自然の堅塞として防守に便利な山林に據つてゐたからであるが、それが其の有利の地を捨てゝ一朝、南朝鮮や遼東方面へ出張つて行つたから、結局災厄を被つたのである。

斯の如く、古來形勝の地を占めて、滿洲の森林に據つたのは肅愼・靺鞨、後には渤海國を成したツングース民族であつて、渤海國は、寧古塔の南八里東京城を中心として、東はオホーツク海、朝鮮の東北に勢ひを制し、我が日本とも交通して、約二百年の生命を保つたのであるが、それ以上に長壽を保つた國家はなく、滿洲では折角國家が成立しても、三方から攻め込まれる爲にいつも永續が出來ないのである。

故に比較的長壽を保つた渤海國でも藤原氏が興り初める頃に興つて後二百年餘、延長五年には契丹の爲に滅ぼされた。此の契丹とは支那史に所謂遼であつて、元來沙漠の民、遊牧の民たる蒙古人であるが、前にも述べた通り、これは騎馬民族であるから、渤海を倒して代り立つても、森林地たる滿洲を支配することは出來ない。すると今度は、やはりツングース族の一種で、曾ては渤海に隷屬してゐた女眞(後の金)が次第に勢力を增大して、恰も今日のハルビンの東に位置する白城の地に都して勢力を占め、遂に又、契丹を滅ぼした。さて契丹（遼）に代つて威を振つた此の金も一時は

甚だ盛であつたが、一歩足を長城の外へ踏み出すと、後備へが手薄になつて治まらない。これは支那へ踏込んで行つた方が利益だから、勢力を得ると南下して支那へ出るのであるが、其の爲に自分の國の事を忘れて了ふから、根源が治まらないのである。そして結局根强い底力が無くなるのである。そこで次には蒙古人が入つて女眞卽ち金を滅ぼした。一口に蒙古人と云ふと、契丹も其の一種であるが、それはツングース系であつたのに對して、此の時に金を滅ぼしたのはヂンギス汗の率ゐた蒙古人であつた。元が卽ち其の建てた國であるが、併しながら武强蒙古人の力を以てしても滿洲を制することは困難であつた。府を置いたと云つてもそれは名ばかりで、吉林省に據るツングースをどうすることも出來ず、最後は又力盡きて明に滅ぼされた。卽ち新興蒙古の國を今度は支那人が滅ぼしたのである。ところが明も、洪武・永樂二帝の頃までは相當强かつたが、これも亦後には追々勢力が衰へて了つた。斯ういふ風に滿洲では、一つの國が興ると、どれかゞ又入つて來て亡ぼすといふ風で、所謂興廢交謝を幾たびも、反復して來たが、最後に吉林省に據つた滿洲人卽ちツングースが出て行つて、明を打ち滅ぼし、新に淸國を建てた。それで芝居は演じ盡されたわけであつて、その時以來滿洲人は漸次支那方面に入り込み、日本海方面は脫け殼になつた。そこで其の跡を覘つたのがロシア人であつて、滿洲人の故地は斯くして次第に蠶食せられる形勢を生んだのである。

さて今度は眼を朝鮮半島に轉じて、其の間に朝鮮がどうなつたかを簡單に云ふと、曾て高麗・百濟・新羅と三國鼎立してゐたのが、後には新羅が爾餘の兩國を滅ぼして之を統一した。滅された高麗・百濟の一部にはツングースがゐて領知してゐたのであるが、新羅は君民共に純粹な朝鮮人で、それが唐の力を利用して二國を滅ぼし、半島の過半に勢威を振つたのである。それから後は高麗國・朝鮮と段々に支配者が變り、滿洲に於ける支那と蒙古との爭ひの際に乘じ、北

進して、彼のロシア人が南下に着手した頃には、鴨綠江・豆滿江を越えて伸展した上、更に滿洲方面へも發展せんとする勢ひを示してゐたのであるが、ロシア人が愈よ滿洲へ踏み込んで、之を經略するに及んで、朝鮮へも手を着け始めた。日韓併合の行はれたのは此の爲である。卽ち朝鮮も、それ自身伸びる力がある間は立派に日本の堤防となつたのであるが、時と共に力が弱くなつて、ロシアの强壓力を防ぎきれなくなつたので、我が日本が國防上の關係から、朝鮮の爲に楯となり、東洋全局の平和のため、日鮮人共同の利益の爲に起つて侵略を防がうとしたのである。

斯の如く日本が朝鮮へ出て行つたのは、決して自ら好んだ事ではなく、東洋の平和のため、日鮮兩民族共同の利益のため、止むに止まれずして立つたのであるが、滿洲についても同じ事が言へるのであつて、東方の五族による滿洲帝國の出生も其の關係に淵源してゐることは、以上に申し述べた歷史事實の明らかに語る所である。

四

以上要を摘んで、滿洲及び其の接壤地の歷史地理を說いたが、今なほ滿洲に匪賊が出沒して止まない理由は、上述の如く、古來滿洲には統一的な支配が行はれた時代がなく、三方から來る勢力の競合する結果、其處に閑空的な無所屬地を生じたが爲であると考へられる。例へば渤海國が勢ひを制した二百年の間を見ても、甚だ奇異な現象として、遼東半島及び奉天省の南部に當る肥沃地が渤海國の物ではなく、郡縣も置かれてゐない。又、朝鮮半島に就て見ても、新羅は大同江以北に役所を置いてゐない。更に唐代にも亦支那は役所を置いてゐない。卽ち此の肥沃地は二百年の長い間、結局何處の物にもなつてゐないのであつて、契丹もやはり此の方面には力を伸ばしてゐない。そんな形勢の反復が匪賊に

跋扈の地を與へたのであると私は思ふ。今日我が日本の武力を以てしてもまだ徹底的には討滅が出來ない程であるから、況んや明の永樂帝・洪武帝や、更に遡つて蒙古のクブライや、漢武などに征討の出來る筈がないのである。

斯の如き內部の禍因が古くから横はつてゐる上に、更に北方から强烈なロシアの壓迫があるから、滿洲の地にはいつも安定がない。そこでどうすれば滿洲が內外の災禍から離脫し得るかといふと、そこに必要なのは日本の加勢である、日本の助力があつて初めて安定するといふのが究竟の結論である。歐洲の局外中立國も武力があつて初めて其の中立を保持し得るやうに、三千萬人の支那人を含む五族平和の王道樂土を理想とする滿洲國も、その理想を實現して實際に平和を得るためには、やはり武力が必要である。而も滿洲國自身には其の實力が無いとすれば、善隣日本の武力の援助が必要であつて、日鮮滿相寄り相親んで守れば滿洲は永久に安定である。其の證據に、アジアの全歴史に於て、外國から攻め込まれた事のないのは、只日本あるのみである。どんな國が東洋に起つても、攻め落す事の出來ない國として日本ほど安全な國はない。漢武帝の武力も朝鮮半島までしか及ばなかつた。蒙古のヂンギス汗、クブライン汗の輩も、日本へは僅に觸れた程度に過ぎない。次は朝鮮である。これも日本と同じく歴史の古い國で、半獨立的ではあつたが、スタビリテイは强い、日本と此の半島の民族とが一緒に力を協せて、滿洲に據り、更に滿洲人とも合體すれば、支那人、蒙古人も生活の安定を得ると共に、ロシア人も平和に安んずることが出來て、滿洲は玆に初めて、有史以來の王道樂土を實現し得るのであると信ずる。